
最恐の魔術師『ギルティ』

ニャコウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最恐の魔術師『ギルティ』

【Nコード】

N9733Y

【作者名】

ニヤコウ

【あらすじ】

弱虫の少年が一人いた。少年は最強になろうと決意し、旅に出る。そして、様々な人に出会い最強の『魔術師』『冒険者』になっていく。そんな異世界モノファンタジー。奴隷、主人公補正ありの成り上がり？です。最初から主人公最強です。

プロローグ『弱虫の決意』

「やーい弱虫！」

「Lv1のへなちよこが！いつまで泣いているつもりなんだよ」

彼らは、そう罵り笑う。僕を蹴り、殴り暴力を使い楽しむ。

そう、僕の村の子供達からのあだ名は『弱虫』だった。

僕はもともと、家がそれなりに裕福だったので、最初から子供達に馴染めず、浮いていた。体も弱かった僕はちょうどいい玩具だったのだろう。直ぐに村のガキ大将だった村長の子供に目を付けられ、虐められた。

あいつらは、顔や手足などは殴らず、見えないところをあざがない程度に殴る。うちの親は放任主義なので、そのことに気付かず時間が過ぎていく。その中で僕は気付いた。

本当はレベルの差なんてほとんどないのだ…
あるのは、数の力。

事実、それは本当だった。少年を虐めていた集団の中にいた最高レベルはガキ大将のLv3だ。他の取り巻きはLv2もいたかどうか…

それでも数の力は恐ろしい。
それを覆す力をこの少年の細腕が出せるはずもない。

だが、少年には類稀なる魔法の力があつた。それを成長させることができる財の力も身近にあった。

少年は決意した。必ず力を手に入れると…

周囲を囲み蹴りつけてくるこいつらを見返してやろうと…!!

少年は変わろうと決意した。

弱者の集団

少年の決意から7年が経った。

色素の薄い金髪、魔力を感じさせる紫色の不思議な瞳。平均より大きい178の身長。上の子の容姿をした。15歳に成長した少年――
ギルティ・シャー・クロイツは、使い古したコートを纏い支度をしていた。

「今日は、ロードゴブリン15体の討伐か…」

壁に貼り付けていたギルド発行のクエスト（仕事）が書かれた紙を剥ぎ取る。

討伐ランクEのロードゴブリンはLv18ほどの新米冒険者には中級への門とまで言われている有名なモンスターだ。正直俺のレベルでは到底敵わない敵である。

普通、一人でモンスターを狩る場合、敵のレベル+5以上はないとやっていられない。俺のレベルは14。村人としてなら、かなり強い分類だが、冒険者としては新米だ。

だが、負けるつもりはない。昔とは違い俺は力を持っているのだから…

腰のベルトに剣を差し、屋敷を出る。今日の狩場はここから32kmほどの森の中だ。少し歩かなくてはいけない。

のどかな、田園風景。隣にある街ダースとは大違いだ。平和で誰も競い合おうとしないそんな村だ。

ギルティが村はずれまで向かっていると、前の方から人の集団が歩いてくるのが見える。
剣の柄をコートで隠す。

「よお、よわむしい久しぶりだな」

とてもめんどくさいやつにあってしまった…

俺の目の前には今でも、お山の大将をはっている村長の息子ジルとその取り巻き達がいた。

「ああ、ジルさん久しぶりだね」

「だなあ、お前が家に引きこもっていて俺たちも寂しかったんだぜ？」

下品な笑みを浮かべながら、思ってもみないことを言い放つジルに周りの連中がゲラゲラ笑う。

ここで訂正をしたいんだが、俺は別に引きこもっていたのではなく、魔術を習っていて、外出は魔法でダースまで行っていたので、偶然こいつらに会わなかったただけだ。めんどくさい

「ところで皆さんは、家を手伝わなくていいのですか？」

ここにいた俺とジルを除けば、皆農家の息子でこんな真昼間、普通は仕事をしてなくてはならないはずなのだが…

「んなあもんでもいいんだよお」

「お前はとりあえず、金さえだしときゃいいんだからよ」

そっつい、十数人が俺を取り囲む。…要するにカツアゲかこいつらどうせ、反撃もしてこないだろうと油断してにたにたと笑声をあげ

る取り巻きたち。

「…めんどくさいな…」

「ああ！？何か言ったか？」

「その薄汚い顔をこっちに向けるなっ…っていったんだよ？」

解る？そう馬鹿にする言葉に逆上する不良たち。単純な単細胞め
懐からナイフを取り出し、笑みを更に深くする男たちの醜悪さは酷
いっ…たらありやしない。

「多少は痛い目みないとわからないのか！このお坊ちゃんは」

ジルの叫び声に応じた何人かが突っ込んでくる。

その動きは何と単調なことか！！ギルティはこの場にいるどんな人
よりも速く動いた。すれ違いざまに掌底で胸を強く打つ。

「遅すぎるだろ？そこら辺のモンスターの方がまだ動けるぞ？」

「んだとおごらあ！！」

挑発され、更に攻撃が単調になる。俺が剣を故意に隠しているため、
相手は丸腰だと勘違いしているのだろう。

また一人…と倒れて行く。こいつらの平均Lvは9程度か…どうせ、
弱いモンスターを寄って集って殺して得た経験だろう。弱いのも当
然である。

何時の間にか集団は3人になっていた。ジルと二人は同時に剣を抜
きはなつ。

「モンスタードロップか？運がいいことだな」

「ち、調子に乗りやがって！」

「見たところ、ウルフからのドロップ品だな」

「だ、黙れ！！」

二人が剣を構えて走り出し、それに合わせて俺も隠していた。剣を抜き放つ、二人は俺が剣を持っているとは思わなかったようで、顔が驚愕にゆがむ。

すぐさま二人の懐に入り込み戦技『餓狼』を放つ。餓狼は俺が考えた魔術を取り入れたクラフトだ。剣の腹を打ち付けられ真上に吹き飛ぶ。その滞空時間のうちに用意していた魔力を実体化させる。

「ファイヤーボール（笑）」

極力魔力を入れないで作った火の玉が二人を襲った。

「ま、魔法……」

ジルは後退りをしていた。

「逃がすと思う？」

「戦技霞・餓狼」
クラフト

半透明になった衝撃波がジルを襲い、八つ裂きにする。

「ふう…これは儲かったな」

そういい、ギルティは周りにいる奴らの装備と金品を剥ぎ取りに掛かった。

弱者の集団（後書き）

お読みいただき有難うございました！

ギルはすごいこ設定です。自分でスキル作っちゃうんだもん！
あと

ギルティくんは、基本はSぎみです。

そして、拙い戦闘描写すみません

準備

「ワープ」

俺は中級魔法の時空間魔法を発動させる。これは、どこでも、任意に移動できるのだ。

強い光がギルティを包む。次の瞬間には、石畳の上に立っていた。

ここは、ダース。ロードゴブリン15体の討伐の報酬を受け取りにきたのだ。

こうして、ギルド最年少の天才ギルティは今、クエスト報告をしているのだった。

「クエストランクE ロードゴブリン15体の討伐が確認されました。はい、これが報酬です」

「ありがとう」

礼をいい、机の上に置かれた金貨の袋を受け取る。大丈夫…ちゃんと金貨500枚が入ってた。

「にしても、本当にやるとはなあ」

後ろの方からガハガハと大きな笑い声が響く。

「でも、弱かったですよ？」

「おいおい…あれを簡単に弱いなんて言ってやるなよ。あれを一人

でそのレベルで倒せるのはお前くらいだろ」
「そんなもんですかね」

大柄な男――ガドスは呆れ顔で少年を見ていた。

ガドスのレベルは26でこの辺りでは抜きん出ていたのだが、本人から言わすと20メートル離れていたら、この少年には勝てないだろうとのことだ。

――最も…魔術戦だけならこの国で何人がこいつを圧倒できるか…単純に戦術がなければ、王宮魔術師にも勝つだろう。

この時代、最高の魔術師でさえ、中級魔法を全修得するのは、人の人生全てを費やすのだ。人間では、中級魔法の上…上級魔法は習得さえてきてはいない。それなのに、この少年はこの年で下級魔法を全修得し、中級を幾つかマスターしているのだ。その力は末恐ろしい。

その少年は、にこやかにまるでそんな力は有していないかのように、振る舞い、ギルドを後にした。

ギルドを出たあと、ギルティはジルたちが持っていた装備を売り払いワープで家まで戻ってきていた。

「お帰りなさいませ。お坊っちゃま」

「ああ、アンディー明日、金を使うから貯めて置いたのを用意していてくれ」

出迎えた執事長に要件だけを言いつつ、部屋に引きこもる。

今日の臨時報酬で予定金額に達したのだ。

「やつとか…」

そう、2年も費やしてモンスターを狩り貯めた金貨6000枚。

これだけあれば、豪邸の一つや二つ簡単に建つだろう、だが、冒険者は金が異様に掛かる。

普通の一般家庭なら、一年で10枚の金貨があれば、事足りる。なのに、冒険者は武器一つ買うのに金貨10枚は少なすぎるのだ。伝説級の武器などは、1億をゆうに超える場合もあるだとか。

問題の金は何とかなった。

冒険に最低限必要なものは、情報と力と仲間だ。情報と力は既にもうある。

あとは、仲間か…

「こんな、ガキと命の危険のある冒険をしようと思うやつは一人もいないだろうし…」

「やつぱり…奴隷かな？」

こうして、明日の予定は決まった。

準備（後書き）

次回、奴隷市場に行く予定です。

三人の奴隷

翌日、ギルティは少し離れた先日の街ダースより大きな街、ガーナに訪れていた。理由はもちろん、奴隷購入のためだ。

なぜ、金を払ってまで奴隷に拘るのかは訳がある。冒険者は狙われやすいのだ。職業柄金をたんまりと稼いでいるため、盗賊に襲われたり、仲間として雇った奴に後ろからグサツとやられたりなど、まああることだ。その点、奴隷は『隷属の首輪』をつけさせられているため、主人の命令は絶対でもし、主人を殺した場合は、その奴隷たちも共に死を迎える事になる。よって安心なのだ。

ギルティは奴隷商の館に招かれていた。此処までくるのに少ないとは言えない額のチップを払ってきたので、相手方には金払いのいい上客だと思われることだろう。

考え事をしながら、壁に飾られた絵画を見ていると、扉がノックと共に開かれた。

「お待ちせしてすみませんでしたギルティ様」

「いえいえ、さほど待つてはいませんよ。ここの絵を見ていれば、一日中、充実した時を過ごせますしね」

メイドを引き連れたタキシードを着込んだ商人は雰囲気を観察するにこの館の主だろう。

「私はこの奴隷商の館の主　ギルバートと申します。以後お見知りおきを」

商人…ギルバートは掴みづらい笑みを浮かべながら、メイドに紅茶

の用意をさせた。

「早速ですが、今回は、冒険に行くために必要な奴隷を”とりあえず”一人買いたいのですが…」

「冒険者ですか…」

「ああ…罪人はもちろん無理ですが、戦いに関して、ベテランではなくていいです、むしろお金は払いますので、若い人を男女問わずお願いします」

そう言つて、俺は銀貨を三枚取り出し、ギルバートの前に置く。もちろん賄賂だ。

銀貨三枚は農民の10日分の給料と同じくらいの金額だ。これによつて、俺が金を持っていることが相手にわかるだろう。

「わかりました。それでは、こちらの方で用意させときますので、少々、お待ちを…」

俺はそういい、席を立とうとするギルバートの前に、”金貨”一枚を置く

「ええ、全部見せてくださいよ？後これは、俺からの気持ちです」

そついい、金貨をもう一枚足す。銀貨三枚、金貨二枚を受け取つたギルバートは、捉えづらいあの笑みを浮かべ、一礼をしながら出て行った。

「ふう…」

これで、全ての奴隷を見せてもらえるだろう…たとえ商売に不利益が生じるとしても…

20分後、メイドさんとお茶のお代わりを貰いながら、談笑していたところにノックをしながら、ギルバートが入ってきた。

「ギルティ様、ご用意ができましたので…」
「わかりました」

答えながら後を追う。メイドさんがこちらに手を振っていた。思っていたよりも、速かったな…後10分以上は待たされると思っていたが…

「ここです」

ギルバートは扉の前に立ち止まり、メイドに扉を開けさせた。

「ギルティ様のご要望に合えばいいのですが…」

通された大部屋には20〜30人ほどの奴隷がいた。男女比は3：7で女が多い。身売りをするのは農家のが多いので力仕事が出る男はあまり売られないのだろう。年は見たところ、12〜18ぐらいか…

ゆっくりと歩きながら、じっくり見て行く。奴隷達は、一様に目に光を無くし、濁った色をして虚空を見つめていた。

奴隷は、国から認可されていて、立派な労働力として扱われる反面、金持ち貴族などに買われて、性奴隷として扱われたり、人権を無視して働かされたり…など問題が多々あるのだ。

この奴隷たちは、皆そのような未来に絶望し、希望を失い感情を己

の意思で消したのだろう…
だが、そのようなやつは俺には必要ない。

こうして、36人全てを見せてもらい、気になった3人を残して他はギルバートさんにこの部屋から退場させてもらった。

一人は、こちらをまるで親の仇のように見る女。髪は赤髪、容姿はまあまあ…スタイルはスレンダーと言えるかどうかの境目。年は17ぐらいだろうか？俺より年上だ。

二人目は、年は15か…無表情だが決して感情がない訳ではなく、意図的にしているように見える少女。黒髪でスタイルは良く、赤髪と比べると胸がとてもデカイ。容姿は、段違いと言つていいほどに綺麗だった。そしてなにより、その少女の目には強い力を持っていた。

最後は、16歳ぐらいの男だった。顔は童顔で幼さが少し残るが、口元に浮かべた笑みが全てを台無しにしていた。目は糸目でまるで狐のよう、感情が全く読み取れない。

「さて…どうしましょうか…」

三人の奴隷（後書き）

お読みいただきありがとうございます。感想や要望などとしどしどしW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9733y/>

最恐の魔術師『ギルティ』

2011年12月2日14時55分発行